

# 児童の造形活動における相互作用についての一考察

教科・領域教育学専攻

芸術系コース（美術）

M 0 8 2 1 5 H

羽 田 野 崇

## 1 研究の動機と目的

日々、実践に取り組む中で、子どもの造形活動において、なぜ充実の度合いに差が生じるのかという疑問をもっていた。ここで言う充実の度合いとは、プロセス（造形活動への取り組み）、プロダクト（作品）において見られる、熟考あるいは試行錯誤による充実感の度合いを指す。

充実の度合いに差が生じることについて、一学級におけるある題材を想定してみる。当然のことながら、全ての子どもたちにとって、同じ材料・用具、同じ教室、同じ指導者である。つまり、教材、学習環境、教師変数ともに同一となるのである。よって、それぞれの子どもの造形活動における外界とのかかわりに、差が生じる要因が隠されているのではないかと考えた。

これを受け、授業実践における造形活動の様子にはどのような傾向があるのか観察した。その結果、造形活動への取り組みについては、「他者とのかかわりや語り」が大きな意味をもったと考える。よって、本研究では、造形活動における相互作用と言語に焦点を当て、取り組むこととした。

以上のことから、本研究における目的を、「相互作用を活性化させることで、造形活動の充実度が高まる」ということを仮説として位置づけるとともに、実践を通し、相互作用を活性化させる方略を明らかにしていくこととする。

## 2 論文の構成

### 第1章 研究の動機

#### 第1節 研究における問題意識

#### 第2節 造形活動への取り組みの傾向

#### 第3節 結論

### 第2章 相互作用から見た造形活動

#### 第1節 造形活動における「他者とのかかわりと語り」

#### 第2節 他者とのかかわりの活性化

#### 第3節 結論

### 第3章 集団としての造形活動

#### 第1節 造形活動における学習集団

#### 第2節 子どもの意識を「イメージや表現の客観的検討」に向けさせる

#### 第3節 結論

### 第4章 造形活動における自立

#### 第1節 学習における規範性

#### 第2節 他者のイメージや表現の肯定的捉

#### 第3節 結論

#### 第4節 本論における結論と今後の課題

## 3 研究の概要

まず、学習集団を、子どもの目から見た造形活動が「得意である」群と「得意であるとは言えない」群とに区分し、それぞれの相互作用の内容を分析した。語りを通しての相互作用においては、自己の表現に対し、独り言と自己内対話を通じた「自己評価ーメタ認知的活動」や他者との会話を通じた「他者評価ーメタ認知的方略」といった「イメージや表現の客観的検討」が行われているということが分かった。

一方で、「得意である」群では「得意であるとは言えない」群と比べ、造形活動において「他者の表現が参考になる」と感じる子どもが多く

見られた。これを受け、次に、子どもたちが造形活動においてさらに他者の表現を参考とするよう、新たな方略を検討した。

これに向けては、個別の他者とのかかわりにおいて、最近接発達領域の理論（媒介理論）を基盤とし、かかわりに伴う言語についても考えた。それとともに、最近接発達領域の理論における内化については、習得（方法を知る）に加え、専有（他者に属する何かあるものを取り入れ、それを自分のものとする）を位置づけた。また、対象を個人から集団に広げるために、媒介理論（主体、道具、対象からなる三角形）の下に、規則、共同体、分業の三つを加え、拡張した。これら三つについては、規則を「学習における規範性」、共同体を「学級・学校」、分業を「交流における参加」と置き換え、集団としての造形活動として構造化を図った。

そして、実際の造形活動においては、「学習における規範性」がこれらを支える要件になると考える。この「学習における規範性」とは、自他のイメージや表現を肯定的に捉えるとともに、他者の表現を見たり、他者とイメージや表現について語ったりすることで、自己のイメージや表現を客観的に検討していこうとする意識であると捉える。

そこで、低・中・高学年において、どのような「学習における規範性」がかたちづくられ、機能するのか検討した。その結果、低学年では、「他者のイメージや表現に目を向けるとともに、そのよさに気づく」こととなった。中学年では、「他者のイメージや表現におけるよさに気づいたり、参考にしたりする」こととなった。高学年では、「他者のイメージや表現を参考にしながら、自己のイメージや表現をよりよいものにする」こととなった。このような意識の形成にあたっては、実践が規則に先行するというヴィトゲンシュタインの言語ゲーム論の立場に近い状況になると考える。

以上のような「学習における規範性」は「イ

メージや表現の客観的検討」とともに、自ら造形活動を展開していこうとする態度である「造形的自立」を支えるものになると考えるのである。

#### 4 今後の課題

本研究における今後の課題として、次の二つをあげる。

一つは、本研究で示した方略について、果たして一般化が図れるかどうか疑問が残るということである。本研究では各々の取り組みの動機を兵庫教育大学附属小学校の子どもたちの姿に求め、その実態を解釈することからスタートしている。よって、その実態がローカルな文脈にあることは否めない。

もう一つは、本研究で定義した「集団としての造形活動」という枠組みと「学習における規範性」という概念の間に齟齬が生じないかという懸念である。エンゲストロームは、ヴィゴツキーの「媒介理論を表す三角形」を「人間の活動の構造」に拡張するにあたって、マルクスの論を用いている。このことは、実践が規則に先行するヴィトゲンシュタインの言語ゲーム論の立場に近いと考えている。しかし、厳密に見た場合、この見解が妥当であるかの判断は難しい。

以上の二点について、引き続き取り組むこととし、子どもたちのさらなる育ちに向けて研究内容を深めていきたい。

#### 5 主な参考文献

- Engeström, Y.: 拡張による学習, 新曜社, 2004  
Vygotsky, L.S.: 思考と言語, 新読書社, 2004  
Wertsch, J.V.: 行為としての心, 北大路書房, 2002  
Wittgenstein, L.: 哲学探究 (ヴィトゲンシュタイン全集 8 藤本隆志訳), 大修館書店, 1976

主任指導教員 初田 隆  
指導教員 村上 裕介